

身近な異文化 アイヌ文化に出会う

【平成26年6月28日 鹿児島会場：鹿児島市中央公民館】

北原次郎太 氏 北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授

1976年、東京都生まれ。

千葉大学博士課程修了（学術博士）。2005年よりアイヌ民族博物館学芸員勤務となる。2010年4月より現職。

アイヌの宗教文化と物質文化、とりわけイナウについての研究を専門とするほか、アイヌ語、口承文芸、芸能などの研究に携わる。



身近な異文化 アイヌ文化に出会う

はじめに

みなさん、はじめまして。ご紹介いただきました北原と申します。今、会場の皆様に向かひまして、私どものやり方で日本文化のおじぎにあたるしぐさですけれども、「オンカミ」というしぐさでご挨拶をいたしました。終わったところで気が付いたのですが、上にもご覧の方がいらっしゃいますね。大勢の方にお集まりいただけてとても嬉しく思っております。

今、北原次郎太という名前でご紹介いただきましたが、私にはアイヌ語の名前もありまして、「北原モコットゥナシ」という名前も持っております。それから、講演のタイトルを勝手に変えてしまひまして、『身近な異文化 アイヌ文化に出会う』というタイトルで始めました。脇にあるせっかく作っていただいた垂れ幕と中身が違いますけれども、ご了承ください。私の「北原モコットゥナシ」という名前ですね、実は27歳の時につけてもらひました。もともとアイヌ語の文化では、子どもが生まれてすぐに名前をつけるということをいたしません。ちょっと不思議ですね。今の私たち、アイヌ人も含めて、現代の社会ですと子どもが生まれたら、一週間以内に名前を付けなければいけないんですけれども、もともとのアイヌ語の名前というのは、おおよそ子どもが生まれて5歳6歳くらいになってきた頃に名前を付ける。その頃になりますと、その子がだいたいどういう性格をした子どもかということがある程度定まっていますので、それに応じた名前を付けるということです。

そういう慣習からいうと、私は20年ほど手続きが遅れましたが、名前を付けてもらひました。この名前、北海道大学でアイヌ語を研究されている佐藤知己先生という方が付けてくださいましたけれども、「モコットゥナシ」とは「すぐ寝る」という意味なんですね。子どもの頃は、寝つきが悪くて先生や親を困らせていましたが、最近はどうも何か起きていられなくなってしまひて、「君は良く寝るな、眠りが早い。それで『モコットゥナシ』だ。」ということで、名前をいただきました。

さて、早速ですけれども、内容に入っていきたいと思ひます。おそらく、こちらにお集まりの皆さん、アイヌについて改まって話を聞く機会というのはそんなにないのではないかと思ひます。人によっては今日初めてアイヌについてじっくり話を聞く、あるいは展示などを初めてご覧になるという方もいらっしゃるのではないかなと思ひます。

そういうわけで、はじめに一つ、アイヌ語でご挨拶をさせていただきたいと思ひます。アイヌ語ですから、聞いてわからないところも多いかなと思ひますけれども、1分ちょっとくらいのご挨拶ですので、どうぞ聞いてください。最後に、私がまた「オンカミ」というおじぎのしぐさをしますので、よろしくお願ひ致します。

イラムマカカ イラムトイネレ ウトウイマカネ アスルフクヌ
カムイエトウレン ヌプル大隅 タパン鹿児島 エコタンコンロク
ウタラパウタラ タネポタプネ アシリウヌカラ アキアシラン
タパンウヌカラ アキクシタプネ チクシルカシ ウトウイマヒネ
トゥアトウイカマ レアトウイカマ アラキアシシリ タパンペネノ
アキアヤッカ チヌカライヌ ウアイヌパテク ウヌカラシリ
ソモタパンナウ ウタシパカムイ カムイネヤッカ ピリカネウサラ
ウキナンコロ ウネテクサマ ウネピタキ クエアシカイシリ
ソモネヤッカ テエタエカシ エカシカラプリ ウネアクスタプ
アリタクボカ アケウトウムカシ クエアマカラ アセレマコロケ
ウタラパケウトウムカシ エコオンカミ クキシリタパンナ ハエエエエ

先祖の代から 遠く音に聞いていた
神の住むなる あやに尊き
大隅の国 この鹿児島に お集まりの皆さま
ただ今 私達は初の対面をしました
皆さまに お目にかかるために
二つの海 三つの海を越えて やって参りました
ただ私達だけが対面したのではなく
私達を守る神々も ここで対面をしたのです
私は言葉が得手ではありませんが 先祖からの習慣により
皆さまを守る神々と 皆さまのお心に拝礼をし
ただ一言だけでも 先祖からの言葉を 皆さまの心に届けます

今、申しました言葉はアイヌ語の中でもちょっと特別な言葉を使っています。普段、家族同士あるいは友達との間で交わす言葉ではなくて、どちらかという先ほど中村理事長がお使いになっていたような、公式な場所で改まって使う言葉です。そして、より改まった形でやろうとすると、今のように節(ふし)に乗せて言葉を述べるということを致します。ですから、アイヌ文化ではよく歌と語りの境目がなかなかわからない。特にアイヌ語がわからない方は、今、歌を歌っているのか昔話を語っているのかむずかしい、と言われるくらい、色々なものに節をつけて語る、そういう文化なんですね。

さて、簡単にご説明しますと、「この鹿児島という土地はかねがね噂に聞いておりました」。実は私、高校の時に修学旅行で熊本までは来ましたが、それ以来、九州に来ましたのは二度目です。「この場所の噂というのはずっと聞こえていた、素晴らしい土地だというふうに聞いてはいたけれども、今回ここに来て、皆さんとこうやって対面をすることができま

した」。このために私たちも飛行機に乗って海を越えてやってきましたけれども、大変な長旅でございました。

そうして「ここでお目にかかれたことを大変嬉しく思う」わけですが、私たちの考え方は神様がたくさんいます。日本の文化も、もともとは八百万の神というふうに言いまして、たくさんの神々がいる。今の感覚で“神様”っていうと、何か唯一絶対の神様という感じがいたしますけれども、アイヌ文化における神様は非常にたくさんいる。さらに、人間ひとりひとりの後ろにも、その人を守っている“憑神”とか“守護霊”というふうに言いますけれども、“トゥレンカムイ”という神様がいらっしゃることになっています。人と人とがこのように対面致しますと、人間同士顔を突き合わせるわけですが、その背後にいる神様同士も対面しているということになる。そして私たち普通の人間には神様の声は聞こえませんが、おそらく今、私の守り神と皆さんお一人お一人の守り神が、ゆったり対話をしながら楽しんでるところだろう、こういうふうを考えます。ですから、「私が皆さんにご挨拶申し上げるにあたって、まず皆様を守っていらっしゃる守り神様にご挨拶をして、それから皆様に対してもせめて一言でも私たちの言葉でご挨拶をしたい」と申し上げました。

実は今日おいでの皆様にも、アイヌ語の挨拶を覚えて帰っていただきたいと思います。この場にいらっしゃる数時間の間に絶対に覚えていただいて、覚えていただかないと帰りのドアが開きません、というのは冗談ですけども。覚えていただく言葉は簡単です。「イランカラプテ」この言葉ですね。ぜひこの言葉を覚えて帰っていただければと思います。早速ではございますが、一緒に唱えてみましょう。「イランカラプテ」と私が言いますので、真似して後についておっしゃってください。（「イランカラプテ」）ありがとうございます。発音もたいへん良いと思います。この「イランカラプテ」という言葉、最近では「こんにちは」という意味で使われております。本来は最初に私が皆さんに対して申し上げたような正式なスピーチの中で使われる言葉です。ですから、日本の言葉で言うと、「本日はたいへんお日柄もよろしゅうございますが」といったような、かなり改まった物言いです。けれども、アイヌ語を覚えるにあたって、まず「こんにちは」からアイヌ語にしていきたい、そしてアイヌ人もそうでない人も自分たちの暮らしの中で普通にアイヌ語が響いている、そういう状況を作りたいということで、アイヌ語を学ぼうとする人々はこの言葉を使うことが多いです。ぜひこの言葉を覚えて帰っていただけると、今日の私の講演はもうこれで終わっても良いというくらい大事な言葉ですので、よろしく願いいたします。

2つの文化 異なるところ、似たところ

さて今日お話ししたいことは、簡単に言うと「アイヌ文化と日本文化は違う」、当たり前のことですが、日本文化とは違うアイヌ文化というものについてぜひ知っていただきたい。限られた時間の中ですので、話し尽くす、語り尽くすことはなかなか難しいですけど

も、この同じ日本の国のなかに日本の文化とはまったく違うものがある。日本の文化と違うということは、つまりそれを振興したり、あるいは学術的に研究したり、そういうことには日本文化とは別な手だてが必要だ、ということです。日本語とアイヌ語も全く違う言葉ですね。よく私はアイヌ語を紹介する仕事をしていますので、「日本語とアイヌ語はどういう関係ですか」というふうに聞かれますけれども、関係を強いて言うとしたら、おそらく数千年の間、隣り合って話されてきた言葉。お互いに借用語があるなど関係は大変深く、言語の親戚関係、これを「系統関係」と言いますが、そういう意味で言うと、およそまったく関係のない言葉です。日本語についての教育をいくら行っても、アイヌ語を話せるようにはなりません。反対に、アイヌ語についていくら教え込んでも日本語を聞き取ったり理解したりということはできない。ですからまったく別な物としてそれぞれに研究と教育をしなければいけない。そういう違う文化、違う言葉が私たちのこの一つの国の中にあるということを是非この機会に知っていただければと思います。

その一方で共通点もたくさんあります。私は宗教文化について勉強していますが、調べれば調べるほど日本との共通性というものがよく見えてまいります。日本ばかりではなくて、アイヌには北のお隣さんもたくさんいますので、北の方の隣接した民族との共通点ですとか、あるいはもっと広い地域のなかで見えてくる共通点というものがたくさんあります。違う文化だからと言ってお互いに理解が不可能なわけではない。通じ合うことももちろんできる。感覚的にお互い直感的にわかる場所ももちろんたくさんある。そういったことも少しご紹介したいなと思います。

そして、最後に申し上げたいのは、このアイヌ文化について。これから私がお話するのは、おもに130年以上前の生活文化のことです。非常に古い。130年も経てばアイヌ人の暮らしも大きく変わりますので、今も昔どおりの暮らしをしているアイヌというのはまったくおりません。私はスーツが苦手なので、よくこういう自分たちの民族衣装で正装しますが、こういう着物を着て、髭を生やしてやってくると「ああなるほど、これがアイヌか」とよく言われます。私、前に北海道白老町にあるアイヌ民族博物館というところで働かせていただいておりました、そこには本州あるいは海外からお客さんがたくさんいらっしゃる。中には、本などで見た「髭を生やしたアイヌ」を期待してくるお客さんもいらっしゃる。しかし、こういうふうに髭を生やしているアイヌというのは、そんなにたくさんいません。ですから「せっかく北海道に来たのに全然本物のアイヌがいない」と残念がる。そして私のところに来て「ああ、いたいた」と、「あんた何代目だい？」と聞いたりします。実はこういう質問には「アイヌの暮らしも変化する」とか「アイヌが北海道以外にも暮らしている」という発想が抜け落ちている。言い換えれば「アイヌは『アイヌらしく』暮らしているはずだ」、「居住地も生活スタイルも旧習どおりで個人の選択はない」という前提にたって発せられているのです。そこで「私はアイヌといえばアイヌだけど、東京生まれなので江戸っ子のアイヌです」と言うとちんぷんかんぷんな顔をしてお帰りになります。これはたまたま趣味でこういう服を着て

いるのと、それにこの髭は付け髭ですから、はずせばすぐ外せるわけですね。よく家に忘れてしまっって講演に行くこともあります。

何が言いたいかというと、私がこういう格好をしているのはたまたまそういう趣味だけで、日本人で言えば丁髷を結って歩いているようなものです。だからこういう暮らしをしている人はまずまったくいない、と言っていいわけですね。

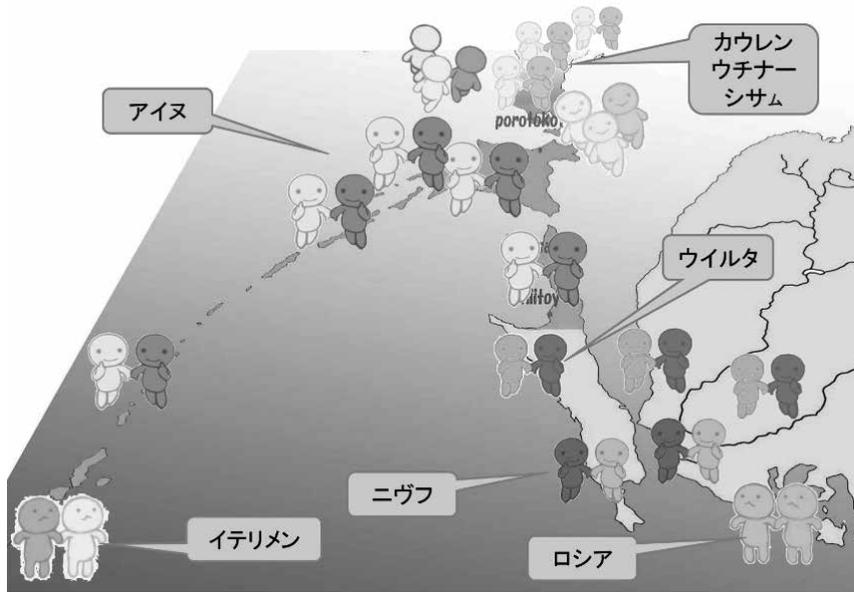
一方で、その過去の文化となったものに、私達アイヌがまったく価値を感じないかと言うと、そうではありません。皆さん多くの方が日本の方、そしてこの九州の鹿児島の方だと思っています。130年前の鹿児島の人の暮らしと今の皆さんの暮らし、まったく違いますね。だから、じゃあ過去の鹿児島の文化は自分たちにとって意味のないものかと言えば、それはそうではない。自分たちが今その通りに暮らしているわけではないけども、何らかの形で自分たちの心の中に、暮らしの中に生き続けていて、そしてそれはとても尊いものだということはお納得いただけると思う。アイヌについても同じですね。特にアイヌの文化は、様々な事情によってうまく伝えるということが難しくなってきた。そういうなかで消えかかってしまった文化もあるけれども、やはり大切なものとして私たちが今もう一度取り戻そうとしている、そのあたりのことをお話したいと思います。

在来的アイヌ文化

まずアイヌとはどういう人々なのかということをお話するところから始めたいと思います。まずかつて住んでいたところ。樺太それから北海道、千島列島の全島、それから本州の東北北部あたりにもアイヌ民族が暮らしていたということがわかっております。それから昔話していた言葉は、先ほどお聞きいただいたアイヌ語です。そしてどういう暮らしをしていたかといいますと、まず言われるのが採集という活動をする。それから狩猟、狩りですね。漁労、水産物を採る仕事、それから農耕もいたしました。そして重要なのが交易という仕事です。これは言ってみれば「商売」です。商売をして周りの社会とつながっている。アイヌの暮らしというのは、アイヌ人の社会の中で完結しているわけではありません。もちろんずっと日本社会ともつながってきましたし、その他の多くの民族、北方少数民族あるいは中国王朝やロシアともつながりをもつ。こういう暮らしをしておりました。

居住地

地図で見るとアイヌが住んでいたところ、こんな感じです。この地図の中で濃い色になっている部分が、かつてアイヌが暮らしていた土地です。わざとこの地図は南北逆さまにしてありますけど、私たちの感覚から日本列島を見るとこういう感じっていうのをちょっと体験していただければなと思います。ふつう日本で使われている地図は、北が上になっていて、北海道はその端に描いてある。そういう地図に慣れた感覚からすると、北海道っていうのは何か日本のずっと北の方、最果ての土地で、さらにその奥地の方に何かアイヌとかっていう



のがいるらしい、そういう感覚をお持ちの方もいらっしゃるのではないかと思います。ところが私たちにすると、宗谷岬や知床は果てではない。その先にまだまだ同族が暮らしている。そして本州というのは何か不思議な世界、行ったこともないし見たこともない。もともとアイヌの人たちはお

そらくこういう感覚を持って、この地域を理解していたのだらうと思います。

さて、この地図の中の濃い色になっている部分にアイヌが暮らしていました。ここが北海道です。そしてこの点々とある島、これが千島列島とかクリル列島。今、北方四島と呼ばれているのはこの列島の南端部分ですね。この端から端までおよそ1000キロあります。ですから本州がすっぽり入ってしまう。こういう広い地域の中で、特に暮らしていたのはこの北の方の島々、このあたりに拠点を作りながら、南の方の島まで狩りや採集に出かけていく、そういう暮らしをしていた。そしてこちらの島の端っこはカムチャツカ半島ですね。この半島の南端あたりまでは、アイヌが居住していたということがわかっています。それから北海道の北にあるこの細長い島、樺太島ですけれど、このおおよそ南半分くらいに暮らしていた。このように大きく3つの地域がありますので、「北海道アイヌ」ですとか「千島アイヌ」あるいは「北千島アイヌ」、それから「樺太アイヌ」というふうに、その地域の名前をかぶせて呼ぶ。細かく言うときにはそういう呼び方もあります。

実を申しますと、私の祖母はこの樺太の西海岸にあるオタスフというところで生まれました。そしてこちらに敗戦と同時に北海道の余市町に避難してきて、その時に私の母親がお腹の中にいました。この辺りに余市町という、リンゴが有名な町があります。そこに上陸してそこで私の母親が生まれた。で、私自身は東京で生まれましたけれども、元をたどっていくと、樺太のアイヌということになります。今日着ているこの衣装も樺太のものを作ってもらいました。

方言と地域アイデンティティ

そんな具合に暮らしぶりも地域によってちょっとずつ変わってきます。自然環境と密接に関わる生活ですので、どういった植物があるか、あるいはどういった生き物がいるか。それから、隣り合っている人々がどういう人々かということによって少しずつ生活が違う。それ

からアイヌ語の中にも、方言と言いますか、土地ごとの言葉の違いというのがあります。例えば私の名前「モコットゥナシ」ということで付けていただいたのは、北海道の新千歳空港がある千歳市の辺りの方言を元にして付けていただきました。ですが、ほんのちょっと東の方にある新ひだか町静内という地域に行くと、「モコットゥナシ」という名前は「寝込みを襲う」という意味になっちゃいます。全く意味が変わってしまいますけれども、別にいいやと思ってそのまま使っております。そんな具合に土地によって少しずつ言葉も違うということがある。アイヌ民族の中にも地域的なアイデンティティというものがあります。

さて、こういう地域にアイヌ人が暮らしていて、その周囲はどうか。南の方にはカウレン、ウチナー、シサム、こういう人々がいる。カウレンというのはアイヌ語ですけども、「朝鮮半島の人々」を指す言葉です。高麗から来ているだろうと言われているのですが、カウレンとかカウリンと呼ぶ人々が南の方にいる。それからウチナーは琉球の人々ですね。そしてシサム。この言葉が日本人を指す言葉で、こういった別な民族が南の方に暮らしている。それから北の方に行きますと、ウイльтаという別な民族が暮らしていて、その人々はウイльта語というアイヌ語とまた全く違う言葉を話します。この方々はトゥングース諸語と言いまして、大きな言葉のグループがある。このグループに属する人々で、ですから大陸の方にたくさん親戚がいる。さらに北にニヴフっていうまた別な民族が暮らしています。この人々も暮らしぶりはかなり近いですけども、言葉としては全く違う。それからカムチャツカ半島に行くとイテリメンというまた違う人々がいる。イテリメンの他にもカムチャツカにはチュクチですとかコリャークといったさまざまな民族が暮らしているわけですね。そして時代が下ってくるとロシア人がやってくる。こういう具合にアイヌの生活というのは歴史的に見てもずっとさまざまな人々との関わりのなかで作られてきたということが言えます。

そして現在はこのとおりにはありません。先ほど「かつて暮らしていた」場所と言いましたが、おおまかに明治維新ぐらいと捉えていただければと思います。明治維新ぐらいまではこういうふうにも暮らしていましたが、その後さまざまな出来事があって、千島の場合は明治8年に千島樺太交換条約というものが交わされて、千島全島が日本領ということになる。その時に一番南端まで移住させます。それから樺太の方は何度か変遷がありましたけれども、最終的に敗戦の段階でソ連が占領したということで南の方へ移住していく。それから近代に入りますと、南の人々が北へどんどん移住してきます。九州からも大勢の人が北海道にいらっしやいましたので、北海道の言葉の中には九州弁にルーツのある言葉がたくさんあります。反対に我々も今度は南の方へ移住していくということで、現在は何人でもどこに住んでいてもおかしくない、こういう状況になっていますね。私も最近親戚を色々と訪ねて歩きますけれども、結構海外に暮らしている親戚も少なくないということで、現在はグローバル化の時代ですから、本当にさまざまな場所に暮らしていますけれども、もともとアイヌの文化というのはこういう地理的な状況の中で出来上がってきたということです。

くらし

それではここからですね、暮らしの方を見ていきたいと思いますが、採集、漁労、狩猟、こういうものについて、代表的なところだけかいつまんでご紹介したいと思います。

採集①

まず採集①ということで、食べ物。採集というのは簡単に言いますと、周囲の自然環境の中から、自分達の生活に役立てられるものを集めてくる。これは女性が盛んに行います。女性は家で家庭の中を守っているのではなくて、山に入って行って力仕事をしてきます。北海道のちょうど今頃の時期、春から夏にかけてはさまざまな山菜が野山に満ちています。そういうものを集めてきます。冬になると全く植物がなくなってしまうよね。木の葉も全部枯れてしまって草も萎れてしまう。そうしますと冬の間食べる野菜のようなものはどうするかというと、この時期に採って全部保存しておかなければいけない。今のこの短い期間に一年分の貯蔵っていうものをしてしまわなければいけないんですね。ですから大忙しです。

アイヌの女性は本当に植物についての知識を豊富に持っていて、単に種類が多だけでなく、その植物ごとの特徴がありますので、根っこが食べられる、葉が食べられる、一年中毒があるけれどもこの時期だけは食べられる、とかですね、そういった事細かな知識がぎっしり頭の中に詰まっています。ですから、私なんかアイヌと言っても本当に家でゲームばかりして育ったアイヌですから、山に行っても何にもわかりませんが、山をよくご存じの方と一緒に歩くと楽しいですね。そのあたりにもこれも使える、あれも使えるという。九州にもおそらくそういう文化がたくさんあると思いますけれども、北海道でもそういう自然の中からはいろいろなものを見つけてきて使う、そういう暮らしがずっとありました。

採集① オオウバユリの根を掘り、澱粉を取る。



ここに写真が出ていますのは、オオウバユリ、特に代表的な植物ということでこれを出してまいりました。これはですね、名前からもわかりますようにユリのような綺麗な花が咲くので生け花に使われることがあります。本州にもこれは自生しています。北海道から樺太にかけてもこれを良く、実に良

く利用します。

ちょうど今、北海道大学の構内にもこういった植物がたくさん生えていまして、つい先日私は授業でこれを紹介して、全員で大学の中を探し回ってこれの写真を撮ってくるという課題を出しまして、学生が100人くらい携帯電話を持って藪の中をウロウロしていましたけれども、そんなに深入りしなくても至るところに生えている、本当に身近な植物です。これは、雄株と雌株というふうに雌雄ありまして、雌株の方ですね、雌株の方の根本には大きな球根のようなものができてきます。これを集めてきて洗った状態がこれです。本当にユリの根によく似ていますが、これは非常に繊維が強いです。普通の植物は球根そのまま焼いてかじる、あるいは茹でてかじるというふうに食べてもおいしいです。オオウバユリもそのように食べても味はいいんですが、繊維がものすごく強い。油絵の筆をかじっているような感じですね。口の中に強い繊維が残ってしまって、なかなか食べることが大変であるということで、今度はこれを繊維と必要な栄養分に分離します。この中には澱粉が大量に含まれていますので、ひたすら潰して、それでそこに水を入れて攪拌する。そうしますと澱粉と繊維に分かれる。繊維は軽いから水に浮いてきますね。澱粉は重たいので下の方に沈んでいくということで、見事に栄養のある部分だけを取り出すことができる。そしてこのようにして取った澱粉、不純物が少ない順番に1番粉、2番粉、3番粉って3種類くらい取れますけどね、1番いいところは薬としてお腹がいたいときに飲むこともできる。食べ物も取ってこられるし、そこから薬を得ることもできる。例えばこれが採集の文化の一つです。

採集②

それから食べるものばかりではありません。身の回りに使う日用品もすべて周囲の自然の中から材料を得てくることができます。例えば代表的なものがオヒョウニレという木の皮からですね、これも初めは分厚いごわごわした皮ですけども、その内側にあるしなやかな部分を取り出して、それを細く裂いて糸をつくる。そしてそれを機織りにかけて、こういう反物を仕上げた着物を作ってしまう、こういうことができます。こういったもの、樹皮の衣と書いて「樹皮衣」と申しますが、これも言ってみれば採集の文化ですね。採集活動によって材料を得てきて、そして女性が自らの技をふるって、美しい着物を作っていく。

漁労

それから漁労ですね。これは主に魚が多いですけども、その他ナマコですとかアワビですとか、あるいはコンブと言った水産物を採ってきて、主に乾燥によって保存します。そしてこのように丸々一本鮭を干してしまう、こういうやり方もありますし、利用の仕方によって何通りかの保存の仕方もありますけれども、やはりこれものぼってくる季節は限られていますので、その間に1年分の食べ物を集めてしまう。そして保存食として利用する。それからもう一つ重要なのは、これが商品にもなるということですね。「アイヌ人の生活は素朴なので、その日必要な分だけを探ってくる」というふうに思われることがありますけれども、そ

漁労

- 季節ごとに溯上する魚などの水産資源を確保し、保存して食用や交易用にする。



うではない。こういった保存食を余分に作っておいて、商品として周辺の民族に対して売る。その対価として自分達の土地では手に入らないような、珍しいものを手に入れてきてですね、自分達の暮らしを豊かにしていくこと行っていました。それから後程紹介しますが、この魚の皮からドレスを作るとか、

魚にもいろんな利用の仕方があります。

狩猟①

それから狩りの文化ですね。獲物を取りまして、さまざまな利用の仕方をします。

鹿ひとつとっても本当に利用しつくすことができますね。一つは「ルシ」と書いてありますけれども、毛皮ですね、これは自分達の防寒具の材料として使う。それから「チホキ」という呼び方もあって、これは「商品」という意味です。つまり本州はじめとした周囲の人々に対して、商品としてこれを売るということが日常的にあった。ですからチホキという呼び方がつく。それから「カム」、肉ですね、食べます。「スム」、油、これもよく利用しますね。アイヌの食文化の特徴として何か挙げるとすれば、油をよく使う。ニシンという魚の油、それから鹿や熊のような動物の油ですね。とにかくたくさんの油を取って、そうすると寒さに強い身体ができあがる。油の中のビタミンを取ることもできる。ですからこういったものを料理にどんどん入れます。そしておいしく食べる。それから腱、「リッ」と書いてありますけれども、これを採ってきて細く裂いてやると丈夫な糸が作れる。ですから、とくに強度が必要な糸として動物の腱を利用するということがあります。それから耳、「キサラ」ですね。これは耳の内側の薄い皮を使って先ほどの鹿笛を作る。それから皮とか蹄の内容物から膠を取ることができる。そして接着剤としてそれを利用する。「クヨイ」というのは膀胱ですね。膀胱をよく洗いまして、膨らませた状態で乾燥させて、そうするとそのまま固まる。ですから丸いボトルが出来上がって、中に液体を入れて利用することができる。「ポネ」、骨です。おいしく食べたり色んなものの材料にしたりします。ですから鹿を一頭獲ると本当に全身余すところなく利用することができます。これが毛皮の着物の写真ですね。「ルシ」、こんな風に靴にもできます。外套にしたり靴にしたり。

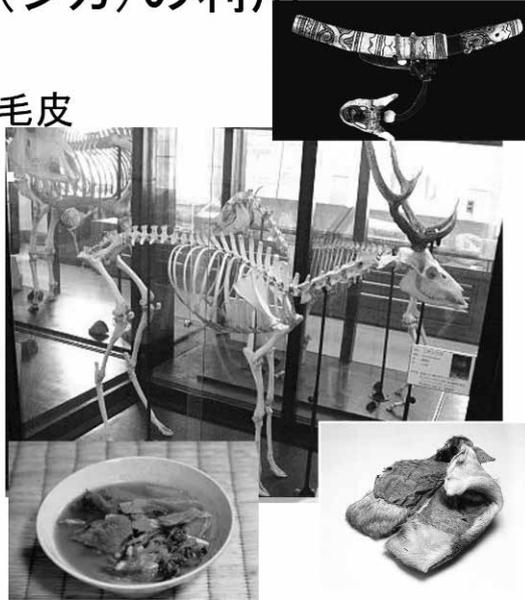
それからこれは料理ですね、鹿の肉で作ったスープ、この中に肉の他にも油をたっぷり入

れる。野菜しか具がなくても、そこに油をちょっと垂らしてやると、魚の風味、肉の風味がついておいしくいただける。これは鹿笛の写真ですね。この部分に薄い膜が貼ってありますが、こここのところに耳の内側の薄い皮を使ってやる。

それから骨の中でも特にこの脛の部分、この部分を使って弓矢の矢を作ります。右上にあるのは角の加工例ですね。角を削ってナイフの柄の部分ですけれども、骨をけずって美しい

ユク(シカ)の利用

- ルシ(チホキ)ー毛皮
- カムー肉
- スムー油
- リッー腱
- キサラー耳
- ヌンペーにかわ
- クヨイー膀胱
- ポネー骨
- キラウー角



工芸品を作る。それから弓矢の矢ですね。上の方に数本矢が写っていますが、ここに鏃がありまして、こちら側は茅という軽い草です。真ん中の継ぎ目の部分に鹿の脛の骨を使います。そうしますと重さが出て、安定して飛ぶ上に威力が増すということで、日本の矢に比べるとかなり短い矢ですけれど

も、非常に強い弓でこれを放ってそして十分な重さがあるので、深く獲物の身体に突き刺さる。あるいは鏃を骨で作ることもできます。こういうふうな生活の中で食べる以外にもさまざまな利用の仕方があります。

狩猟②

それから狩りの中でちょっと特色があるのは、毛皮を獲るための狩りですね。毛皮獣猟というふうにしてありますけれども、これはクロテンという動物ですが、ミンクの仲間です。ですから非常に上等な毛皮が獲れる。こういう小さくてすばしっこい獲物を大量に捕獲するためには、弓矢とか鉄砲って不向きなんですね。なかなかあてるのが難しい。また運よく当たると毛皮に大穴が開いちゃって値段が下がってしまうという、とても残念なことになりますので、こういうものは罠で獲る。アイヌ文化にも特色のある罠がたくさんありますけれども、アイヌに限らず北方民族の多くはこういった小型の毛皮獣を狙うための罠を開発して持っています。それは何故かという、これを中国王朝が大量に必要としたからなんです。貴族が正装するときの衣装に毛皮を使うということで、北方民族に対してもっとたくさん獲れということを求めた。日本では「狩りの生活」というと、原始的なイメージが伴いますよね。ずーっと昔から自然に、何かこう本能的にやってくるようなイメージがありますけれども、そうではなくて、狩りの文化というのもどんどん変化していくし、それは閉じた

狩猟社会の中だけで起こることではなくて、周りの社会とのかかわりの中で新しく変化していく部分もあるということで一つご紹介しておきました。

交易

それから交易の文化ですね。周りの人々とつながる事によって、ここで主に手に入れるのは生活必需品ではありません。日常生活に最低限必要なものというのは、すべて自分たちの地域の中で賄うことができます。では交易で何を求めるかというと、日常生活に必要な米のようなものも手に入れてきます。あるいは鉄器も重要ですね。ナイフとか弓矢、あるいは槍の穂先のような鉄製品、鍋なんかも重要ですけども、そういうものに加えて、もう一つ嗜好品であるとかあるいは宗教儀礼で用いるようなものを手に入れてくる。3つのルートとして本州の日本人社会、それから北方回りですね、中国社会とのつながり、それから18世紀以降になりますと、カムチャツカ半島にロシアが拠点を築きますので、ロシア人とのつながりというものも出てきます。

例えば日本からは漆塗りの器などが入ってきました。もともとは茶道で使う道具も入ってきていて、日本社会から入ってきたものだけでも、アイヌ文化の中で新しくまた変質していく。そしてこれを何に使うかと言うと、お神酒を入れて神々をお祀りする。そういう道具として使うようになりました。それからこの上に「イクパスイ」という道具がのってしまっていて、これはアイヌの男性が自分で作るものですね。お酒を神様に捧げるために使う、あるいは人間が唱えたお祈りの言葉をこの「イクパスイ」という道具が正しい言葉、間違いのない、余分なところのない言葉に直して、神々に伝えてくれるというふうに使われてしまっていて、そういう自分たちが元から作っていた道具と、日本社会から入ってきたものの組み合わせが、ここで新しく出来上がったわけですね。

中国社会からはこういう絹製の織物が入ってくる。これはアイヌ人自身が自分で身に着けることもありますけれども、もう一つは日本人が大変これを欲しがったということで、日本人に転売していきます。北回りで入ってきたものを日本社会の中にまた流していく。そういう中継のような交易の役割もしていました。それからロシアからは、ロシア語も入ってきますしロシア正教も入ってくる。こういう具合にアイヌ社会、アイヌ文化と言っても私たちがイメージするものとはだいぶ違うものも実際はアイヌ社会の中に入ってきて、かなり多様な暮らしがあったということがわかります。

精神文化

それから少しだけ精神文化・宗教文化についてもお話したいと思いますけれども、「カムイ」という言葉が重要になってきます。先ほど言いましたようにロシア正教が入ってきたり、あるいは神道や仏教が北海道にも入ってきたりという具合に、外来の宗教というのもいつでも入ってくるわけですけども、そういったものを取り除いた結果、残るものが言ってみれば在来の、それ以前からアイヌ社会にあった宗教というふうに見えるかと思います。その中

でも重要なのが「カムイ」という言葉ですね。「カムイ」というのは、神、日本語の本来の意味の「神」という言葉とほぼ同じと考えて良い。つまりさまざまな物に対してそこに「神」が宿っているというふうに考えて、その宿っている物を特に敬って、敬意を込めて呼ぶときに「カムイ」という言葉で呼びかけます。そしてこういった多くの神々を信仰する、一種「アニミズム」的な世界観を持っていると言われます。アニミズムというのは簡単に言いますと「どんなものにも命が宿っている」。だからそれに対して人間が語りかけるとか、何か働きかけをすると直接返ってくることはないけれども、相手にそれが通じる、簡単に言うとそういう考え方ですね。ですから、この私が今、手をついているこの台にも命が宿っているというふうに考えます。これはおそらく木でできていると思いますので、木の時にその木に宿っていた魂というのが形を変えてここにそのまんまある。ですから自然の中からとってきた材料を使って道具を作る、生活をするわけですが、そこには自然界から人間の世界に入ってきた、そして手伝ってくれている、人間を助けてくれている命というのが、ずっと生き続けているというふうに考えます。ですから粗末に使っちゃいけないですよ、この机だって乱暴にバンバンって叩いて熱弁振るったりすると「痛い」って怒られますのでね。そういうふうにして何でも生きていうふうに考えている。

それから、今私たちが生物と言って思い浮かべるような動植物以外にも、水とか火にもあらゆる物に命があるという考え方、そしてそこに宿っている命というのは不滅のものなんです。今、私がこうやってしゃべっているのも、私に命が宿っているからですけれども、私の中にある命というものも不滅です。ですから私は時期が来たら死にますけれども、その後私の魂はあの世に行って、他界に行って、そこで生前と同じ生活を続けます。ですから、先に死んだ人々が大勢向こうで待っている。死後もう一度再会することができますね。嬉しいと思うケースもあれば、残念と思うケースもあるかもしれませんが、そうして人が死んだ後もその生活は続く。そして一定の期間を経ますと、もう一度まっさらな赤ちゃんになってこちらの世界に生まれ変わってくる。ですからアイヌの宗教の中では命は、ずっとぐるぐる廻り続けるものだと言われます。人間以外の命、動植物や自然現象などの命はもう一度そのものとして生まれ変わってくるし、人間はもう一度人間として生まれ変わってくるというふうに考えます。そして、靈魂は不滅であるというのはそういう意味ですね。

今、申し上げたようなことを絵で表したものがこれになります。この絵の中で下半分の世界、色がついている世界が、私たちが実際に見たり触れたり、経験することのできるこの世界には、春夏秋冬4つの季節がある。アイヌが暮らしてきた土地にも四季があります。そしてそれぞれの生活がある。そしてずっと高いところですね、天の高いところに神々の世界がある。神々は人間と同じ姿をしています。ただし私たちの目で直接見ることはできません。私たちの目に映るときには、これは約束事になっていまして、必ず何かに姿を変えてきます。それが太陽であったり、月であったり、それから木であったり鹿であったり魚であったりす



る。ですから、私たちが目にする自然だと思っているものは、すべてその中に人間と同じ姿をした生命が宿っている。ここでは木をはがして服をつくろうとしていますけれども、こういう仕事は木の神様の服をいただくというふうに考えます。ここでは囲炉裏の火に向かってお祈りしていますけれども、囲炉裏の火の中には金色の服を纏ったお婆さんが座っていて、そして家の中すべてを守っている。魚と鹿を獲っています。魚も鹿も一つ一つにももちろん命が宿っていて、人間と同じようなことを考えたりしている。その神々を送り出してくれる元締めのお神様がいて、魚を送り



出す神、鹿を送り出す神ですね、こういったもの達の働きによって私たちの日々の生活が成り立っているというふうに見えるわけです。これは熊送り、「イオマンテ」と言われるお祭りを行っている場面ですけれども、ここで祭壇にクマの頭を祀って、そこに宿っている魂に向かって最大限の感謝を示す。その周りにはお団子やお神酒や貴重な…その、お団子もお神酒も穀物から作りますから、これは言ってみれば輸入食材ですよ。輸入してきた大変高級な食材を使って作るご馳走を並べる。それからその前で歌・踊りを披露して、神様と一緒に楽しんでいただく。こういうふうにして人間世界に一時的にやってきた精霊とか神と呼ぶものに対して、人間の側では私のところに来てくれて本当にうれしい、ありがとうと感謝の気持ちを示す。そうしますと、向こうも何かこう喜んじゃって、ちょっと人間的なところがあるんですよ。ありがとうと言われると向こうも嬉しいということで、もう一回来てくれる。

そういうふうにして周囲に対する感謝を忘れなければ自分達の生活っていうのはずっと安泰に続くことができる、そういう考え方を持っています。

日本文化との接点①

イナウ

ここまでアイヌ文化の特色あると言われるところを紹介してまいりました。最初に申しましたように、日本の文化と違うものが日本の国内にあるということを知っていただきたかったです。一方で日本社会と全く相容れないのか、共通するところはないのかと言えばそんなことはない。たくさんの共通点がありますけども、二つご紹介したいと思います。

一つは「イナウ」というものです。私はこれが大好きで1,000本くらい見ましたけれども、木をけずって作るお祈りの道具です。こういうものを作って、なるべく綺麗に作って、そしてこれを地面ですとか囲炉裏の灰の中に差して、そこでお祈りの言葉を唱える。そうしますとこれがカムイのところに届いて、カムイの世界に届くと、木で作ったものが金とか銀に変わると言われています。ですから宝物としての価値があるし、それからその中に宿っている霊力によって、神様の霊験がさらに増していく。ですからカムイとしてはこれを受け取ること何としても望んでいるんですね。だから人間が神様に何かお願いごとをするときには、これを叶えてくれたら絶対にイナウをあげますから宜しくお願いします、とか、そんなふうに語りかけますけれども、こういうものを北海道でも樺太でも千島でも盛んに作ります。主に男性が作る道具ですね。

これがアイヌの宗教の特色あるものとしてよく紹介されるのですが、実は本州にもこういったものがたくさんあるということは以前から知られています。特に有名なのが北関東のあたりですね。群馬県・長野県のあたりではこういったものをお彼岸ですとかあるいは1月15日に行われる「小正月」という儀礼のなかでこれを作って家の周辺に飾るということを行っ

①イナウ 木幣



ている。ですから私もこれについて以前からちょっとは知っていましたがけれども、実は九州のなかにもこういうものがたくさんある。特に大分県のお寺の行事のなかに入り込んでいるしゅうじょうおにえ修正鬼会という、五穀豊穡ですとか、家内安全なんかを祈願する、そういうお祭りがあるそう

です。これが大分県の岩戸寺ですとか、成仏寺などの2つ3つのお寺の記録を見つけましたけれども、現在でも盛んに行われているのだそうですね。お坊さんがこういう「イナウ」のようなものを作って、そして楽しい踊りを踊ったり、これを両手で持って舞いながらお念仏唱えたりするそうです。これとこれ、よく似ていますね。実によく似ているなあというふうに思います。こういう木をけずってヒラヒラしたものを作って、某かの宗教行事の時に使うという習慣が日本中にあるわけですね。

じゃあ日本とアイヌと二つにあると思うとそれだけではない、世界中にあります。最近、私は気にかけて色々探していますが、まずアイヌ文化があって、つぎに日本文化があって、そこからずっと南まで切れ切れですけどもイナウのようなものを作る文化が分布しています。奄美、台湾、ラオスですとか、それから一昨年マレーシアのボルネオに行ってきましたけれども、この辺りの人々も盛んにあれを作る。本当に同じような技術で同じようなものを作るんですね。それから中国の大興安嶺のオロチョンと呼ばれる人々、この人々のところにもイナウのようなものがある。そしてずっと西に行くと、グルジアですとかハンガリーですとか、この辺りにまで形の上では本当に良く似たものが見られる。ここまで広がっていくとそれぞれの文化の間に関連性があるかどうかということがじっくり研究していかなければいけませんけども、少なくともこの日本列島につながる、南からこう来ている同じような木をけずったヒラヒラしたものの文化っていうのは、かなりの確率で関連性があると考えていいだろう。どちらから伝わったかわかりませんし、日本海をぐるっと廻って同じような文化があるということもたくさんありますので、どこからどう広がったかということは簡単にはわかりませんが、おそらくお互いに関係のある技術ですね。そしてそういったものが装飾品として、あるいは宗教的な意味を持ったものとして伝わっていくなかで、それぞれの地元の宗教と融合して、あるいは小正月儀礼の中に入っていったり、あるいはお寺の行事に入っていったり、あるいはカムイを祀るものとして定着していったりという具合に分布しているだろうということが言えます。

樹皮衣

それからもう一つは樹皮衣ですね、先ほどご紹介した木の皮から作る服のことですけども、これは実は日本中にありますね。アイヌ文化について紹介すると、アイヌの人は木の皮から服が作れるんですか、すごい、というふうによく言われますけれど、何の事はない、これは日本中にある文化であって、今アイヌ人が作るようなイラクサの繊維を使った布なんかもですね、戦時中の物が無い時期は、がんばってみんなイラクサを採ってきて、タオルを作るとか色んなことをやっていた。つい数十年前までは日本中に息づいていた文化ですけども、これはその一つです。京都の藤布というものですね。藤の蔓から繊維を取って、糸を作って、そして反物を作る、そういう文化ですけども、これとアイヌの木皮で作った着物、アットゥシと見比べてみますと、素材も仕立て方も非常によく似ているということが分かり

ますね。おそらくこの機織りに使う道具の名称なども含めてですね、こういった機織りの文化というのは、南の方からアイヌ社会に入ってきたのではないかという見通しが立てられます。厳密にそれを実証できるかどうかということは別として、見通しとしてはそういうふう考えていいのではないかと。

一方でアイヌの方にだけ見られる、布の上に別の布を置いて縫い付けて模様を作っていますけれども、こういう模様は何だろうかというふうに考えますと、アイヌの中でもより北の方には、こういう動物の皮とか魚の皮を使った服、こういったものが分布している。これちょっと拡大してみますと模様がいろいろとついています。これは魚の身体の色をそのまま利用したグラデーション模様もありますし、皮の上に別な皮を置いて綴じ付けた、そういう模様もありますね。これは必要があってこういうふうになっています。この部分は一匹分の魚ですけれども、ここも一匹、ここも一匹、数十本の魚の皮を縫い合わせて服をつくりますが、こういうところに必ず同じような模様がある。これは背びれの位置なんですね。背びれのところは何をどうがんばっても穴が開いてしまうので、別な皮をあててそれをふさいでやらなければいけない。そういう必要に応じて別な皮をあてるけれども、ただあてるのでは芸がないということで、それを生かして装飾を作ります。アイヌのこういった樹皮の服に見られるような模様というのは、おそらくこういう動物性の皮とかあるいは魚の皮ですね、こういうものを使ってできあがってきた服飾文化が応用されているのではないかと。南からきた文化と、魚の皮・動物の皮の文化は、元は北からわたってきた文化ですから、そういったものがアイヌ社会の中で融合してこういうものができあがっている。ですから、違うところもあるけれども、全く相容れないこともない。皆さんの日本文化と地続きの文化でもあるということが言えます。

おわりに

アイヌ的価値観とは

さて、そろそろまとめに入りたいと思いますけれども、もう一度繰り返しますが、今日お話ししたかったことの一つは、日本文化とアイヌ文化は全く別物である。見方によって多少見え方は変わってきますけれども、少なくとも日本文化を振興することとアイヌ文化を振興するという事は、全く別々におこなわなければならない。それぞれやらなければならないということですね。それからもう一つ付け加えておかなければいけないのが、例えばアイヌ社会では農耕をそれほど行っていなかったと言われます。ですからアイヌ文化を紹介するときには狩猟採集という言葉が真っ先に来ますけれども、農耕が全くなかったのかというところではない。農耕はかなり一般的に行われていたというふうに考えることができますし、時代を1,000年位さかのぼっていくと、実は江戸時代よりも古い時代の方が、農耕が盛んだったんですね。ですから農耕をやめて狩猟採集に重きを置く社会に変化していったという

ことが考えられます。それは一体なぜなのか。

昔は、人間の社会というものは、原始的な狩猟採集の段階から始まって、そして牧畜が始まって農耕が始まって、工業化して近代社会になっていく。そういうふうに「進化」というふうに考えられていました。けれども、世界各地の狩猟採集文化を実際に見て、現地に行って人々の暮らしを見て研究をする中で、そういう単純な文化の進歩は想定できないんじゃないか、と言われるようになってきた。ここ40年ばかりの間にそういう考え方が出てきましたけれども、アイヌ社会のなかでも同じようなことが言える。もともとは農耕を盛んに行っていた社会が、それをやめて狩猟採集に比重を移していく。

何故そうなったかと言うと、一つは先ほど言いました交易ですね。周辺社会との物のやり取りが盛んになってくる中でアイヌが交易の相手としていたのは、例えば中国社会だとか、日本社会だとか、自分達でも農耕を盛んにやっている地域です。ですからそこにアイヌが農作物を作って持って行っても「いや、間に合っています」と言われちゃうんですね。むしろ毛皮が欲しい、アワビが欲しい、魚が欲しい、というふうに言われる。ですから熊の胆ですとか鷲の羽根なんかも売り物になります。武士が弓矢で放つ時の矢羽に使います。そういったものをどんどん作ってくれという周辺からの要請があって、農耕をやめてそれ以外の生業に時間を使う、そういう社会に移って行ったということが考えられる。

低め安定一過少生産の社会

それからもう一つは、農耕をして限られた土地の中でその作物の生産量を上げていくことに価値を置く、そういう考え方もありますけれども、反対にあまり生産の増大を目指さない。私はよく「低め安定」と言いますが、硬い言葉で言うと「過少生産傾向」なんですね。少なめに生産して多く余暇の時間を取る。一生懸命仕事に追われて食べきれない量の作物を作るよりも、必要な分だけを作って若干の蓄えをしておいて、そしてゆったりと余暇の時間を過ごす。こういうことに価値を置いている社会も世界にはたくさんある。アイヌの中にも、余暇を目指していたかどうかはわかりませんが、働き過ぎはよくない、そういう考え方がありますね。働き過ぎてすべての食べ物を取り尽くしたり、自然の中にある資源を取りつくしてしまったということは、働き者として一見良い事のように見えるけれども、最終的には神の怒りを買って神罰が落ちる、そういう伝承があります。ですからアイヌ社会もどんどん生産の増大を目指すというよりは、この辺で満足する、何も自分にはもう必要なものはない、そういう心境に至ることに価値を置いていたということが考えられる。

それからもう一つは、私は物質の研究、民具の研究が好きなので、それに絡んでよくお話ししますが、いろいろな文化を見ていますと、二つの方向性があります。一つは道具を使う側、人間の身体を極限まで磨いていく文化ですね。例えば、アイヌの男性は「マキリ」というナイフ一丁で何でもできるということに誇りを持っていた。シンプルな道具一つで、その使い方を色々変えていくことによって、さまざまな用途に生かすことができる。そういうふうに身体の方を工夫する、技術を高めれば良いという文化。もう一つは道具の方を改良

していったら、最終的にはボタン一つ押せばだれでも同じものが作れる、そういうふうには道具の方を磨いていく文化。この二つの志向があるというふうには私には見えます。アイヌ社会というのは前者の方ですね、道具はシンプルなもので、少ない道具をいかに工夫して使うか、人間の頭と身体の方を鍛えていくことが大事だっているという考え方が強く見えています。

ことばの社会

よく「アイヌ社会には自分達で作り出した文字がなかった」と言われます。これ、本当はこういう言い方をして欲しくないのです。文字が「ない」のではなく、言葉をこそ重視しているのです。「文字がない」というと実は日本社会も同じで、日本社会も中国から文字をもらってきてそれを漢字として使っている、あるいは漢字を分解した平仮名・片仮名を使うようになってきた。オリジナルの文字がないということ言えば、アイヌ社会も同じことです。近年になって平仮名・片仮名あるいはローマ字を取り入れてそれを少しアレンジして自分達の言葉を書き表すのに使っている。そういう意味でも日本文化と同じということが言えますけれども、いずれにせよ、そんなに文字に重きを置いていなかった社会だということが色々な記録から伺えてきます。ごく最近までアイヌ語だけで生活をしていたお年寄りがいましたので、そういった方々の話を伺っていると、研究者が何しろ何でもかんでもメモを取るっていうことをちょっと滑稽に感じている。「そんなこと書かなきゃ覚えられないのか」という、こういう感覚を持っているんですね。今頭に入れてしまえばいいじゃないかってね。学生と話していると、心の底から文字を絶対的なものだと思っていて、文字がないなんて信じられないなんて言う。文字がない即ち文化がないと感じているようですけど、とんでもない。社会規範にせよ歴史にせよ、言葉によって作り上げてきたものがあつた訳です。それが現代に伝わっていないのは外部からのダメージのためです。言葉による伝承が劣っているからなどということではありません。

文字っていうのは言ってみれば道具の一つだと私は思います。音声的な記号を目で見る記号に置き換える。そして言葉っていうのは、もともとは人間の頭の中から出てくるものですから、口から発する言葉も字で書く文字も同じ言葉なわけですね。ただ人間の脳の外側に一時的に置いておくことができる。そういう道具でもある。例えば、様々な書物を作って研究を蓄積するということができますけれども、そこに積んであるものって言うのは、もう一回人間の頭の中に入れないと、役に立たないわけですね。例えばお医者さんがいて、これは素晴らしいという最新の研究が載っている医学書をたくさん持っている。でも持っているだけでお医者さんになれませんよね。それを全部頭に入れなければいけない。それから、聖書。キリスト教を学ぶ人は、聖書を丸暗記するのがまず前提ですよ。丸暗記して、全部頭の中に入っていないと話にならない。だから聖書という立派な本があるけれども、あるだけでは何にもならないっていうことは、実際に文字社会の人々も普段から体現していることですが、アイヌの感覚っていうのは、もう少し言葉の方に重きを置いていてですね、言葉っていうのは頭の中に入っていないと意味がないっていうね。いかにたくさんの言葉を頭の中に

入れて、それを自在に使えるかっていうことに価値があると考えてきた。こういうふうには、文字が「ない」とか、コメが「ない」とか、アイヌについて語っているにも関わらず、日本文化を基準にした物言いがあふれています。

あるいは国家が「ない」という物言いもあります。アイヌ人はどうして国家を作らなかったのか、っていうふうによく聞かれますけれども、それは作るのが当たり前だという前提に立っている。世の中にはどんなこと一つとってもさまざまな見方さまざまな価値観があって、日本文化とアイヌ文化の違いというのは、どちらかが優れている・劣っているではなくて、目指すところがそもそもちょっと違っているということを私は考えています。

近代・現代・未来へ

さて、こういったアイヌ文化ですね、最初に申しましたように、130年ほど前の生活だということですけども、近代に入ってきて大きな変化をしました。アイヌ民族の近代ということによく言いますのは、この時代のことを「同化」の時代と言うわけですね。近代以前と何が変わったかと言いますと、まず近代国家としての日本というものができあがって、その版図の中に正式に組み入れられる。そこで初めて日本国民となったわけですね。だからアイヌが日本人になったのは140年ぐらい前の出来事ですけども、そこから大きな変化が起こってきます。まず生活も言葉も日本のものを受容することが日本政府によって求められる。同時にそれ以前の習慣が禁止されるということも起こってきました。

この写真の女性は私の曾祖母です。樺太のおそらく東海岸で生まれたチカシュッパという女性ですね。大沼チカシュッパと言います。この大沼という名字も明治になってからつける



ようになった日本式の名字ですね。あんまりこの人の写真は残ってなくて、2枚しかないですけども、そのうち1枚がこれですね。この写真を見ますと、この曾祖母の人生が少し見えてくる気がします。後ろに襖のようなものが見えていて、日本家屋らしいところにいる。日本髪に結っている、和服を着ている。下の方にも座布団のようなものが見えていて、日本の暮らしになっているなということが窺えます。ただこの写真ではあまり鮮明ではありませんが、曾祖母は口のまわりに入れ墨をしていました。これはアイヌの成人女性の習慣でして、北海道では両手の手の甲から肘にかけて、そして唇のまわりに入れ墨をします。樺太の方では手にはしなくて、唇のまわりにする。そして本州にもかつては入れ墨の習慣があったと考えられているので

すけれども廃れてしまった。だから日本文化で入れ墨というと、特定の職業の人々に結びついていて、怖いというイメージを持たれてしまう。しかし、さきほど日本列島も含めて、イナウのようなものが分布しているとお話したあの地域には、どこでもほとんど入れ墨をする文化が残っています。特に女性がよくします。しかも両腕とか顔にする。そういう文化圏の中にアイヌも日本も属していたということなんです。そして、これはアイヌ社会の中でも大変大事なものです。成人の証でもあるし、結婚をするためには入れ墨をしていなければいけない、あるいは死んだあと、先祖の国に迎え入れてもらうためには入れ墨をしていなければいけないなどと言われる。

そしてもう一つ大事なことが、ファッションですね。女の子にとってこれは素敵なものである。曾祖母は入れ墨が排されて行く過渡期に育ちました。ですから、同年代の女の子はほとんど入れ墨をしていないのですが、年上のお姉さんたちはしている。その入れ墨がとてもキレイで、憧れて入れてもらったそうです。現在は入れ墨をしている女性はおそらく一人もいないのではないかなと思います。私はお二方だけ直接お会いしたことがありますけれども、実際に入れ墨をした方に会うと本当に素敵ですよ。綺麗な青みがかかった黒で、本当にきれいなものだなあっていうふうに実感しました。写真とか絵で見ると結構おそろしげに見えるけれども、あれは写真に写りやすいようにモデルに墨を塗らせて撮影後に着色するといった主に技術的な問題、あるいは日本との差異性を強調する意図からだろうと思います。本来はとてもキレイなものですから、曾祖母が憧れてお姉さんたちと同じにしたいと考えたのもよくわかります。ところが、その後日本人と隣接して暮らすようになっていって、その入れ墨が差別の対象になる。ですから薬品を使って色素を薄めるということは何度もしたのだそうです。入れ墨を落とす薬というのが流行って、それを自分で買って試す。そういうふうにして本来憧れてしたはずの入れ墨を後に消さなければいけなくなりました。けれども自分の名前はチカシュッパというアイヌ語の名前はずっと使い続けた。サチっていう和名もありますけれども、アイヌ語の名前をずっと使い続けていました。

事あるごとに宗教儀礼も行って、そういった伝統社会の習慣に価値を感じる、それに対する愛着が消えない、でも一方で周辺の日本社会に合わせていかなければいけない、という曾祖母の葛藤は、近代以降のアイヌが大なり小なり抱えてきたものでしょう。そして現代のアイヌもそういう状況の延長にあるわけです。ですから私たちにとっていわゆる伝統的なアイヌ文化というものは、異文化に近いものです。本来自分たちが持っていた文化が、近代以降に別な文化を身につけざるを得なかったために「異文化」となってしまった。最初に聞いていただいた挨拶の言葉も、それからこの後楽器演奏の中で紹介する色々な演目も、すべて復元的に大学に入ってから身に付けたものですね。それぐらい今の私たちにとって伝統的な文化というものは遠いものなんです。

けれどもかなりの苦勞をしてでも、それを取り戻したいという気持ちを持った人々が現在でも少なくない。そしてそれはどんどん増えて行っていると私には感じられます。1970年代

の終わり頃から文化復興の動きというものが組織的に行われるようになってきました。1997年にはアイヌ文化振興法という法律が新しく作られまして、今日のこの催し、アイヌ文化フェスティバルというの、その法律に基づいて実施されている一つの、アイヌ文化の知名度を上げるための取り組みですね。こういうふうにして少しずつ活動の輪が広がってくる。国会議員になられた萱野茂先生、お亡くなりになりましたけれども、こういった社会の色々な場に出て行って、活躍の幅を広げていくという取り組み。もう一つ、熊の霊送りの復興を経験者に学びながら、若手がいっしょになって復元的にお祈りを行うという取り組み。これらは、まったく違う世界のように見えますけれども、萱野先生は普段は宗教儀礼の復興を先頭に立って指揮していた方ですから、一見すると全く違うようなこの二つの取り組みが、両輪のように連関して行われているということになります。そして若い世代の人々にもこういう活動が広がってきているところです。

そろそろ時間になりましたので、終わらなければいけないですけども、ここで今日初めてアイヌについての話を聞いていただいたという方も少なくないのではないかと思います。改めてアイヌについて知っていただくということにどういう意義があるだろうか、ということについてですが。一つは当然、知的好奇心を刺激するということは、すればするだけいいと思いますので、そういったさまざまなものを見聞きして自分の知見を広げていくということももちろん非常に大事なことです。それからもう一つは「イナウ」の話、あるいは樹皮の着物の話のように、一見するとまったく違う文化に見えるけれども、よくよくそれを鏡にして自分の文化を見直してみると、実は同じものがあつた。私が日本文化を見ていてよくそれを体験しますけれども、日本文化の中の不思議だなと思うところがアイヌ社会の中にもあつたりして、だから周りの文化との比較を通じて、自らをより深く知っていくことができる。という意味でも色々な文化に触れる、特に身近な異文化に触れるってということには意味がある。ですからアイヌ文化に触れることによって、皆さん自身の地元の文化に新しく気づくところもたくさんおありではないかなというふうに思います。

そしてこうしたさまざまな文化があるってということを知ることが、それを受け入れることにつながっていきます。目指すところとしては色々な価値観があるということを知って、それをありのまま受け入れられる社会を作っていく。つまり異なる文化を持つ者どうしが相互に許容されて共に生きていくことが出来る社会というものを目指したい。私たちのアイヌ文化が日本社会の中で承認されていく、こういうものがあるというふうには受け入れられていくことを目指して、こういう取り組みをしているわけですけど、そのことは私たちだけにとってメリットがあることではない。日本社会の中の他の立場の人々にとっても多様な立場が認められる、多様な価値観が認められることは、日本社会の中にある色々な多様性についても認められていく、そういう社会づくりにつながっていくと思います。

これでおしまいにさせていただきますが、皆さんにもアイヌ文化を広めていくための大きな役割というか皆さんが持っている力というのがありまして、それは皆さん自身がアイヌの言葉、アイヌの文化を受け入れてくださることなんですね。この場にお集まりの皆さんが、

今日「イランカラッテ」という言葉、これ一つを持ち帰って自分の周囲の人々にお伝えしてくださる、あるいは誰かが「イランカラッテ」と言った時に、それを聞いてわかる、受け入れてくれるっていう雰囲気が出来上がることが日本社会の中でもっとアイヌ文化が盛り上がっていくために何よりも必要なことですので、是非その点ご記憶いただければと思います。

私は今日この後もずっと出番があっずうずうしく何回も出てきますけれども、一回ここで引っ込みたいと思います。どうもありがとうございました。

<著作権>

本書は、各執筆者並びに公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が著作権を有します。転載・使用する場合には、当公益財団の許可を得て下さい。

Copyright © 2015

* All rights reserved. No part of materials may be reproduced without permission in writing from the publisher.

平成26年度 普及啓発講演会報告集

発行年月 2015年3月

発行 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

〒060-0001

北海道札幌市中央区北1条西7丁目プレスト1・7(5階)

TEL (011) 271-4171 FAX (011) 271-4181

ホームページ <http://www.frpac.or.jp/> e-mail ainu@frpac.or.jp
